あなたを愛して

工学部
物質生命化学科4年
柏木　陽仁

夏が過ぎ、柔らかな日差しが照らす植物園。その片隅で、一人の少年の視線が花に注がれている。まるで一つに絞れないかの様に視線をうろうろとさまよわせている彼に私は声をかけた。

「こんにちは。今日も花の観察に来たのね」

「あ。こんにちは！　今日も利用させて貰っています」

観察に注力していたせいか、私が声をかけるまで気が付かなかったらしい。少し驚いた様子を見せた後に笑顔で挨拶を返してきた。

目線を少し下げると、スケッチブックと鉛筆のセットが入っている鞄が映る。彼は以前に絵を描くことが趣味だと私に話していた。

私は土が湿っていないか確かめながら植物に水を与えていく。この辺りの植物は、下手に植物自体に水をかけてしまうと弱ってしまうものや枯れてしまうものが多いのだ。

「今日はこれから何を描くのかしら」

「冬咲きベゴニアを描こうと思っています」

「まだ花も咲いていないのに？」

「咲いていないからこそ描きたいんです」

互いに目を合わせずに言葉を交わしていく。彼は私と少し気が合う所がある。華やかな開花の時期だけではなく、咲く前の植物も愛でて筆で描きおこそうとしているのだから。冬咲きベゴニアはその名前の通りに秋の終わりから冬にかけて可愛らしい小さな花を咲かせる植物だ。彼はこの花が大のお気に入りの様で、彼と初めて出会ったのも冬咲きベゴニアの近くだった。

本当に君は冬咲きベゴニアが好きね、と言ったものの返答が無い。顔を上げて辺りを見回してみると、彼は既に興味が木立ちベゴニアに移ったようで先程いた場所を離れていた。どうやら集中しやすく冷めやすい性質な彼は、スケッチを不意に止めると徐に別の場所に行ってしまうのだ。職員である私は、あくまで自分の作業を優先しなければならない。彼は集中すると周りの声が聞こえなくなるので若干心配しつつも、それ以上言葉をかけずに水やりを再開した。

「それでは私は別の作業があるので、これで失礼するよ。ちゃんと、閉園時間には帰ってくださいね」

ベゴニア達の水やりが終わり、集中していて聞こえていないだろう彼に一応声をかけつつ部屋を後にする。別の部屋にある植物の手入れの準備を進めていると職場の同僚の方が話しかけてきた。

「あの子、今日も来ているのね」

「はい。念の為に言ってはおきましたが、おそらく閉園時間に気付かないと思いますので声をかけてあげてください。それでも、気付かない様子でしたら私を呼んで頂けますか？」

「分かったわ。それにしてもあなたも大変ね。任せている私も申し訳ないけれど、普段の業務の他にイベントの企画しつつも、あの子を気遣ってあげているなんてねぇ」

彼女は私よりもこの植物園に長く勤めているため、植物の知識に関しては私は遠くは及ばない。何故その彼女が差し置いて私がイベントの企画を

やっているのかというと、先日ぎっくり腰が再発してしまった。植物を扱う仕事は鉢植えや肥料などの重いものを運ぶ為に重労働だ。イベントの運営が難しくなってしまったので、信頼されているらしい私に引き継がれて、彼女は私の補助に専念してもらっている。

「そろそろ一年の付き合いになるので、それに関しては慣れましたよ。では、行ってきます」

「行ってらっしゃい。私が無理だったら、しっかり呼ぶのであの子をよろしくね」

私は無心で花壇の土いじりを行っている最中に、ふと彼と出会った時の事を思い出した。思えば最初に出会った時も、彼は普通の人とは変わっていたのだ。閉園時間を過ぎても、ベゴニアの辺りをうろついていた彼に話しかけたのがきっかけだった。

「どうやってここまで来たのか分からなくなってしまいまして。途方に暮れて、花壇の周りをぐるぐると回っていました」

迷子になってしまった彼に駅までの道順を教えても、彼は分からないという。まずは自分で行ってみなさいと追い出したものの、植物園の前まで戻ってきてしまったので仕方なく駅前まで送ったのだ。

「ここまで来れれば大丈夫です。迷惑をかけてしまってすみません」

彼は平身低頭して謝った後、人混みの中に消えていった。そこまでは良かったのだけど、次の日にまた植物園まで来たのに帰れなくなっていた。それを十回近く繰り返し、途中からは保護者らしき方に連れ帰られつつも、どうやら体で道を覚えたらしく一人で帰れるようになった様だ。彼には変わった行動が目立つ。視線はいつもさまよっているし、会話の最中にもいつの間にかいなくなってしまう。別の物に興味をそそられている内に上の空のまま木の幹にぶつかったこともあった。職員全員、彼のことが心配で仕方がなかった。

それでも、迷惑をかけていることは理解しつつ態とやっているわけではないので、いつの間にか彼のことは私に一任する流れになっていた。私が彼に話しかけるのも、入園者がまだ少ない時間帯ということもあるが、見守るという意味合いが強い。

日が傾き、来園者が増えつつも閉園の時間に近づく頃は他の来園者に園内の植物について説明したり、事務仕事が残っているために彼に関わっている暇は無い。閉園時間を過ぎた後、彼を帰す為に私が呼ばれることになった。

部屋に入ると、暗くなっているにも関わらず、絵を描くことに熱中している彼の姿があった。

「もう閉園時間よ。続きは次の機会にしてくださいね」

私が声をかけると、彼は私の方へと振り向いた。そして私の後ろの壁にある時計を見て「あ！」と声をあげた。

「ごめんなさい、気が付きませんでした。また今度来ます！」

慌てて荷物を片付けた彼は、一目散に家へと帰っていった。足元を見ると鉛筆が一本転がっている。彼が忘れていったようだ。

「全く。次に来たら渡さないと」

存外、私は彼が来るのを楽しみにしているのかもしれない。

そんないつもの日常を繰り返し、ひと月が経った頃。やってきた彼が何時になく暗い表情をしていた。今日はスケッチも思うように進んでいないようで、何度か破られた形跡がある。

「どうしたの。そんな暗い顔をして」

「自分が何になりたいか分からないんだ。僕自身、何がやりたいのか分からないし」

彼のスケッチはとても綺麗に描けているので、将来は絵描きを目指しているのかと思えばそうではないらしい。

「絵を描く仕事はどうなの？」

「絵は嫌いじゃないし好きだけど、仕事にしたい訳じゃないんだ。そもそも、僕の思ったような時にし

か描けないから仕事には向かないと思う」
「そっか、ちゃんと考えているんだね。じゃあ、まずは自分が好きなことを知るために色々してみるといいよ」
「そういえば、何で植物園の職員になったの？　参考にしたいから聞いてもいい？」
　いきなり思ついた様に彼が質問を投げかけた。私にもこの仕事に就いた明確な理由は無い、けれど……。
「そうだね。元々植物が好きなのもあるけど、大学生のなったばかりの頃にちょっとした時間ができて植物園を訪れたことがあって感動したから、なのかな？」
　私の言葉に、彼は珍しく相槌を打ちながら耳を傾けていた。
「僕も花は好きだけど、小学校以来育てたことないんだよね。やりたい事についてはもう少し考えてみるよ」
　物憂げな彼の表情に私はこれ以上言葉を続けることができなかった。
　彼は私の事を仲の良い知り合いの様に慕ってしるし、私は彼のことをまるで弟の様に思っている。けれど、私は植物園にいる時以外の彼の事を想像することすらできない。大体午後を過ぎた時間か早い時には午前中には植物園を訪れている彼は、家族以外だと私くらいにしか相談できる相手がいないのかもしれない。
「私がアドバイスをあげられる訳ではないけれど、少し何とかしてあげたいな」
「だったら、あなたのできることをすればいいんじゃないかしら？」
　その日の閉園後、事務仕事のまとめ中に呟いた独り言を同僚の方に聞かれてしまったらしい。少々赤面しながらも話をして、少し相談に乗ってもらうことにした。
「私にできることって何でしょうか」
「自分の仕事を見せてみたり、彼の言ってた事から何かできることを探してみるといいんじゃないかしら？　ほら、この間の来園イベントも終わったわけだし、少し余裕はあるんじゃない？」
　そういえば、子供達の来園イベントをこの前やってたっけ。そうだね、私の仕事を見てもらうのはいいかも。
「ありがとうございます。頑張ってみますね」
　私は残りの仕事を片付けた後、ノートに企画を書き始めた。
「一日体験、ですか？」
「そう、仕事について悩んでいたでしょ。今度気味がよかったら、私と一緒にやってみない？」
「分かりました。相談してみます」
　そんな私と彼のやり取りの後、彼は許可を貰い植物園職員の一日体験を行うことになった。当日にやってきたのは彼だけではなく、男性の方も一緒ではあったが。
「えっと、この方は？」
「僕の付き添いの方です」
「一緒に来てほしいと言われまして。私のことはあまり気にしないでください」
「はぁ、分かりました。それでは一日体験を始めましょう。まずは……」
　掲示板に張られたチラシの確認や張替え、園内の掃除や、植物の手入れを二人で行っていく。付き添いの方は、彼が集中力を切らして他のものに目が移りそうになったり、ふらふらと何処かに行ってしまいそうになる度に、私の代わりに引き留めていただいた。
「これから冬咲きベゴニアのお手入れをするけど、忘れないで欲しい事があるの」
「何ですか？」
「葉っぱや花に水が溜まってしまうと傷んで枯れてしまうの。だから、土をよく見て土に直接あげるようにしましょう」
　二人で土が乾いているか確かめながら、丁寧に水を与えていく。何度かやっていると彼が不意に冬咲

きベゴニアに直接かけようとした。
「待って！」
「あ、忘れてた！　ごめんなさい、体が勝手に動いてしまいました。いつも僕はこんな失敗ばっかりだ」
「失敗しても気付けているなら、いつかは直せるはずよ。だって君も植物園から迷わず帰れるようになったじゃない」
「そうだね。そうだった、気付かなかった。僕だってやれるんだ」
　彼は改めて、そのままゆっくりと土に水をかけていった。
「今日はここまでにしましょう。うっかりしたことは何度かあったけど、よくできていたと思いますよ」
「ありがとうございます。今日は楽しかったです」
「良かった。そう言って貰えると、企画した私もうれしいわ。後、これは職員としてではなく私個人からなんだけどね」
　私は一旦事務室に戻りそれが入っている袋を持ってくると、彼にその中身を見せた。
「これは鉢植えですか？　それに、これは」
「そう、クリスマスベゴニア。つまり冬咲きベゴニアだよ。私が自分で育てた物だけど、君にあげる。育てるのは難しいから初心者の君にあげるのはちょっと迷ったけど、この花が好きみたいだから」
　受け取った彼は、袋の中身を見て笑みがこぼれた。

「貰ったクリスマスベゴニア、大切にしますね！」
　彼は、私のあげた花を大層喜んでくれた。
　その後、後ろに控えていた付き添いの方が私に話しかけてきた。
「本日は彼を体験に誘っていただき、ありがとうございます」
「いえいえ。こちらこそ、本日は色々と助かりました」
「彼は普段はあまり喋りませんし、笑うことも少ないのです。別の方から、植物園を訪れた彼がとても楽しそうだとお聞きしまして、今回は同行させていただきました」
「そうだったのですか」
　少しだけ、彼の生活が見えたような気がした。この植物園が彼が寛げる場所になれたのなら、それは一職員として嬉しく思う。
「これからもご迷惑をおかけすると思いますが、彼のことをどうかよろしくお願いします」
「こちらこそ。私は彼がまた来るのを楽しみにしています」

「冬咲きベゴニアの花がこんなにも……」
「今年もちゃんと咲かせることができたわ」
　冬になったころ、部屋の一角を埋め尽くす冬咲きベゴニアの花達に彼はため息をついていた。

「それで、いい絵は描けた？」
「うん。それで、これはこの前のお返し」
　そう言って彼がかばんから取り出したのは、様々な季節に描いたベゴニアの花を一つに纏めて描いた絵だった。
「前にくれたベゴニアのお礼だよ。お姉さんが貰ってもいいし、良かったら植物園に飾ってほしい」
　描かれたベゴニアはどれも本物に遜色無く美しかった。ありがたく飾らせてもらうことにする。
「それにしても、何で僕はこの花が好きなんだろう？」
「分からないけれど、私があの花をあげたのには理由があるよ」
「何なの？　教えて」
「冬咲きベゴニア・クリスマスベゴニアの中にはね、ベゴニア・ラブミーって名前があるの。私があげたのもそう。少し曲解気味だけど、君が君自身を愛せるようにって願いを込めて贈ったのよ。自分に自信がつきますようにって」
　彼は何かを言おうとして思案のために宙を見つめた後、私にこう宣言した。
「ねえ、僕はなりたいものができたよ。成れたら教えたいんだけど、それまで秘密にするつもり」
「分かった。私はずっと此処にいるから、いつでも待ってるわ」

彼はベゴニアの絵を渡した後から、植物園を訪れることが少なくなった。久しぶりに訪れた彼にそれとなく訊ねてみると、どうやら勉強が忙しいらしい。それでもこの植物園は好きな場所だから、合間を見てまた来るとの事。それと一緒にベゴニアも育てていることも教えてくれた。今年も咲くのが楽しみだそうだ。

ベゴニアの絵はまだ植物園の一室に飾ってある。彼の書いた変わらないベゴニアの絵が、これからも植物園に咲くベゴニア達を見守っていくのだろう。

『あなたを愛して』コメント

このお話を書くきっかけは最近気に入っているクリスマスベゴニアについてお話を書きたいと思ったからです。植物園で働く女性とそこへ通う少し変わった少年のお話、楽しんでいただけると嬉しいです。